様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 6 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２０５２１
研究課題名（和文）　英語教員志望学生の英語力・指導力養成プログラムの開発、実行可能性および効果の検証
研究課題名（英文）Developing and validating the effectiveness and feasibility of training courses in English language teacher proficiency
研究代表者
渡部　良典（WATANABE YOSHINORI）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：２０１６７１８３

研究成果の概要（和文）：本研究に先立って、英語教員に必要とされる資質、能力、技能を、主に文献および面接・アンケート調査によって特定した。その結果を基にして、大学の教員養成科目用シラバスを組み、運営した。授業で計画した内容が実際にどの程度指導できたか、また学生に習得されたかを検証するために、授業を DVD に録画し、学生のリアクションペーパー、テストの結果、担当教員の授業日記を収集した。データの量が多く未だ分析の途中であるが、これまでの結果によると担当教員が焦点をおいた技能と学生の習得した技能との間に大きな間隙がある。一方、教育実習に参加した学生にアンケート調査および面接調査を行い、学生が実際に教えた経験から教授法の授業で指導されている内容が役にたつかどうかを確認した。その結果もまた教授法の指導内容と実習生が実際の授業体験から必要だと認識した技能には開きがあることがわかった。より適切な英語教授法の授業を提供するべく、主に英国、米国の研究会に参加し、個人的に機会を求め有識者に意見を求めた。その結果は未だまとめている最中であるが、まとまり次第公にする予定である。

研究成果の概要（英文）：Preliminary research was conducted to identify the basic skills and competence that are required of professional EFL teachers by means of literature review and interviews with in-service teachers and questionnaires with in-service and pre-service teachers. Based on the information, a range of qualities and skills that professional EFL teachers have to possess were identified. Based on the list of skills and qualities, a syllabus was developed for undergraduate EFL teaching methodology courses. In order to examine the effectiveness of the course, the data were gathered including the teaching log, students' reaction paper and the recording of the classes on DVD. The data are still in the process of being analyzed, and yet it has indicated so far that the course was not as effective as had been expected. One of the reasons for this seems to be that there is a perception gap between students and teachers, particularly the one between what the students reported having learned through the course on the one hand and what the teacher thought he had taught.

The same set of information was used as a checklist for examining if the skills needed for teaching practicum were covered in the course. In-depth analyses of the questionnaire responses indicated that there was a gap between what they felt needed in the teaching in classrooms and what had been taught in the course.

The above results show that greater efforts need to be made to render the content of the undergraduate course serviceable for the teachers, both pre-service and in-service. In order to do find a clue to that end end, an attempt was made to consult experts in the field at international conferences and individual consultations. Part of the outcomes are reported, which show that teacher training courses in Japan need to provide with the would-be teachers the type of knowledge which are practical but based on robust theory. The whole data sets and information are yet to be analyzed and interpreted, the results of which will be published in due time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：外国語教育評価

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、教員志望学生、英語力、指導技能、教員としての資質

１．研究開始当初の背景

英語教員を志望する学生のための教員養成に関する制度については従来より必要な単位数、科目などについて規定があり、ある程度整備されているものの、指導内容と方法についてはほとんどが大学に任されており、さらに各大学での指導方法・内容についてはほとんどが教員に一任されている。現職教員の研修と大学でこれから教員になろうとする学生への指導とを統括する必要性を痛感した。こうすることによってより有効な教員養成の実践が可能となり、延いては現職の教員研修も行うことができると考え今回の申請に至った。

本申請者２名は教員研修やスーパー・ランケージ･ハイスクールの助言者として、また、県や市主催の教員研修会などで英語教員と場をともにすることが多い。これらの経験から、学習指導要領の目標を満たす運用力を生徒に期待するためには、教師自身の運用能力が必ずしも十分でないことを痛感している。特に分担者（加納）は 20 年ほど前には指導主事を担当していたが、その時代に比べ現在教員の英語運用能力が高まってきたという実感はない。研修にあたっては事前に各地域の教育委員の方々と事前に打ち合わせをするが、その際も現状では指導方法・内容などについてはほとんどの部分が講師に任されている。教員研修は教員の英語教育に対する理念的側面に効果を及ぼすが、研修で得た知識を教室で使うまでには至っていないという報告もある。

２．研究の目的

教員の資質については「言語能力」、「指導力」、「対象言語に関する知識」などに分類され、授業観察用にチェックリスト形式を作成するということが行われている（Brown、2001； Richards、2001；Richards＆Nunan、1990; Bailey、2006; Coombe 他、2007、Castle 他、2006； Stronge、2002 など）。わが国でも数え切れないくらい優れた研究がなされている。教員能力検定については Elder（2001）、ケンブリッジ大学の Teacher’s Knowledge Test などもある。しかしながら、これらは充分に体系化されてはいないので、そのまま教員養成や研修で実行できる形とはなっていない。本研究では、これらの成果を基に、効果的な養成や研修に活かせるように整備し、さらにその効果・実行可能性を検証することを目的とした。

３．研究の方法

（1）　英語教員に必要とされる技能を特定するために文献研究、面接、アンケート調査。

（2）　英語科教育法の授業の効果を調査するために授業録画・観察・分析、リアクションペーパーの分析、授業担当者の授業記録の分析。

（3）　教育実習前と後のコメントを得るためのアンケート。

４．研究成果

（1）前段階で行われた調査により特定された、英語教員に必要とされる技能は、以下の 12 項目に分類された。

1)　発問や質問など授業の作り方
2)　教室英語運用能力
3)　学習指導案の作成
4)　教科書等教材研究
5)　ペア活動、グループ活動の運営方法
6)　テスト問題の作成や評価
7)　プリントおよび補助教材の作り方
8)　PC など機器の活用術
9)　４技能の指導法
10）語彙・文法・発音の指導法
11）英語教員の心構え
12）生徒の特性

（2）シラバスと学習者の反応

これらについて英語科教育法の授業シラバスを作成し２年間にわたって実施した。データの量は膨大であり未だ分析の最中であるが、上智大学の履修者が重要だと判断したのは以下のとおりである。9）４技能の指導法、12）生徒の特性、1）発問や質問など授業の作り方、11）英語教員の心構え、5）ペア活動、グループ活動の運営方法、10）語彙・文

法・発音の指導法、3）学習指導案の作成が上位であった。
　これらの授業内容に加えて、最後の週に教育実習生の報告会を行った。これについては特に実習に行く前の履修生から多く参考になったという肯定的な意見が寄せられた。

（3）アンケート調査の結果
金沢大学で行ったアンケート調査（８項目について）の結果は以下の通りであった。

	<= あるのがよい		なくてもよい=>	
	4	3	2	1
1. 発問や質問など授業の作り方	12	6	3	0
2. 教室英語が使えるようになる	17	4	1	0
3. 学習指導案の作成と模擬授業	18	6	0	0
4. 教科書の教材研究	8	11	3	0
5. ペアやグループ活動のさせ方	4	13	5	2
6. テスト問題の作成や評価	1	10	3	1
7. プリントの作り方	5	11	6	1
8. PC など機器の活用術	4	5	10	4

金沢大学で行った教育実習に関するアンケート調査の分析結果と考察は以下の通りである。

教育実習に関するアンケート結果と考察
Ｑ１:全体的な印象を何か。
よかったこと
・教師という仕事が具体的に理解できた。
・教師になりたいと思う気持ちが確かめられた。
よくなかったこと：
・授業の作り方が未熟
・英語力不足を痛感
考察　・教師になろうというイメージと現実を会わせることができる。・教師という職を続けられるかと問う機会になる。・教師に必要な資質能力が見えてくる。

Ｑ２：教壇に立つのには、どのような英語力が必要と思うか。
・自分が教室で、苦痛なく使える英語力を第一に挙げている。
・次に、正確な英語力としての「文法力」。
考察　・学生には、「使える英語」「英語の授業は英語で」といった意識が高い。

Ｑ３：どのような教師がよい教師だと思うか。
教壇に立つ前
・生徒を理解する能力　・熱意・豊富な専門能力・わかりやすく教える技能・公平観　・叱ることのできる力・目配り
教壇に立った後
・専門教科の能力に長けていること・わかりやすい授業をすること・生徒を理解する
考察・実習Before & Afterの特徴
1）前：生徒を理解する力が重要
　後：英語の教科能力が重要
2）前：熱意や誠意が大切
　後：わかりやすい授業をつくる能力が大切

Ｑ４：どの学年でどのような力を養成すべきだったと思うか。

１年	２年	３年
読書	英語専門力	英語専門力
英語専門力	教科教育学	教科教育学
人間力	読書	英会話
教科教育学	ボランティア	読書
一般教養	教員補助ボラ	教員補助ボランティア
教員補助ボラ	ンティア	現場実践経験
ンテイア	英会話	体力
体力	体力	

考察・読書への期待感は消えない。（読まないが）
・英語力と教科教育への期待は大きい。
・教育現場を知りたいという期待感は強くなる。
・教員には、体力が必要であると認識。

Ｑ５：授業を行う準備段階で、何に苦労するか。
・授業の導入・立ち上げの工夫
・生徒の力がわからない
・授業の形態がすぐにマンネリ化
・活動と活動のつながりづくり
・子どもの思考の流れがつかめない
考察・区別が必要
経験すればわかってくること
継続的な研修・研究の積み上げが必要なこと

Ｑ６:授業中に立ち往生を感じる瞬間の、その原因はなにか。
・教材研究不足に尽きる。
・めあてに向かった授業になっていない。
・教材研究の方法・手順についての授業がなかった。
・活動と活動のつながりがなくて、教材研究の段階でも切れ切れになっていた。
・自分のことばと生徒のことばがからまない。
考察・実習成果
・教材研究不足　→　流す授業　→生徒の反応が乏しい　→　つまらない授業」のサイクルを、理解。
・重要な指摘：方法・手順の学習の機会がない。例：教材研究

Ｑ７：自分が作成した教材やプリントは機能するものであったか。
・字の大きさやわかりやすさが不足・未熟
・使用するタイミングのミス
・生徒に必要なものかどうかよくわからない

・タスクの意図が不明確
・十分機能しないで、機械的なプリントになった
・使ってみたら、作成意図がよくわからなくなった
考察：指摘すべき点が２つに分かれる
①作成上の技術が足りない。
②教具や教材・プリントが本来の目的に照らして、機能しないとの指摘。

Ｑ８：自分が描くような授業ができたか、特に発問・質問・指示などが機能したか。
・発問が明白だと、生徒は動く。
・教科の専門の力が十分にないと機能的な発問はできない。
・指示が不明確だと、生徒がバタバタする事態を引き起こす。
・一方的な指示になった。
・自信のなさが、教師のことばに跳ね返る。
・単純な活動に対する指示はよいが、自由度の高い活動に対する指示は難しい。
考察・発問に関する回答は少ない。
・指示の的確さ・適切さなどへのコメント多い。
・発問・指示のわかりやすさが、授業のわかりやすさに直結することが理解されたコメントが多い。

Ｑ９：授業の全体を把握しながら授業を進めるのは難しいことであったか。
・授業を進めるだけで精一杯。
・準備不足だと、全体の把握はできない。
・教壇にへばりく段階では、全体の把握などできない。
・自分中心で、生徒の実態まで把握できない。
・生徒の把握をすると授業は遅延する。
・意味もなく机間巡視をすることもあった。
・できない生徒、できていない生徒の発見は、授業ストップになるのでつらい。
考察・生徒理解・生徒把握は、実は、心の中では歓迎されていない。→避ける？（授業が遅れる。困ったことである。）

Ｑ１０：英語科教育法の授業に関する期待について

年度	１８	１９	２０	２１
項目				
学習指導案がかけるようにしてほしい	5	9	3	8
模擬授業を充実してほしい	7	6	5	1
教室英語の訓練の場を増やしてほしい	1	3	1	1
板書の練習がしたい				1
授業のアイデアの出し方を訓練したい		1		1
授業を分析できる力を育成したい				1
模範授業を見て研究したい	4		1	

考察・学習指導案への期待が大きい

まとめ
①大学教育内容の改善へ教育実習が示す示唆
○教師に必要な資質・能力や仕事内容が理解され、職業選択の重要な場となる。
○実習は、実習前と実習後とでは意識が変わり、生徒理解の重視は授業重視にかわる。
○実習には、経験をすることに主目的があるものと今後への基盤づくりにつなげるものとがある。
○教育実習は、大学教育内容に期待することを浮かびあがらせることができる。
○カリキュラム構成には、技法的な習得と理念的な理解をセットで組み合わせる必要がある。
②大学教育カリキュラム改善に向けて。
○大学教育内容は、不易の内容と流行の内容を備えること。
○大学教育内容は、教員採用試験に求められる資質・能力に関連性をもつこと。
○大学教育内容は、教職ライフ全体に必要となる資質・能力の基礎・基盤との関連性をもつこと。

（4）海外研修からの考察
教育実習後に期待される教師力とカリフォルニア州立大学における１３の teaching performance expectations（１３の教師力）
　カリフォルニア州では、教師力の具体として１３の教師力を考えているが、それぞれにレベル１　教師力を構成している要素に関して十分に理解していること
レベル２　授業を観察して得られるデータ、ケーススタディ、学習計画など見たりしてどのような教師力を適用する必要があるかわかること
レベル３　実際の授業において、教師力を発揮して授業を行い評価したり、授業反省などが行える
といったレベルを設定している。これらの一つ一つに３つの段階があり、満たされるように大学教育実習が運用されている。以下に述べる１３の教師力が実際、実践的に運用できることを目指している。
　もちろん、運用ができるとなっても現職教員と教育実習生では、規準として同じ項目を当てはめたときでも、その充足度は異なる。これは、その後の現職教師版の教師力の基準化の課題になると思われる。

　大学を卒業してすぐに教員免許が取得される日本とは違い、米国の場合は、いわゆる「仮免許」のような制度を敷いている。日本のように所定の科目の履修・修得を満たせば自動的に教員免許証が交付されないアメリカ合衆国では、指導する能力を有するかどう

かを判定することになり、そのための統一的な基準が必要になることは容易に理解できる。その資質・能力として、以下の１３の能力を示している。

TPE1 教科内容を教えるにふさわしい教授方法を適用できること
TPE2 授業を行いながら生徒の学習状況が把握できること
TPE3 評価を分析し、後の授業に生かせる
TPE4 教科の内容に親しみをもたせる
TPE5 生徒を学習に参加させる
TPE6 発達段階に応じて教育を展開できる
TPE7 英語を母語としない者に英語学習が実施できる
TPE8 生徒理解ができる
TPE9 学習指導に関する計画ができる
TPE10 適切な学習指導時間を構成計画できる
TPE11 学習環境を整えること
TPE12 教師としての職業上、法律上、倫理上の義務を遂行する
TPE13 教師の専門性を向上させる

教育実習後に期待される教師力とカリフォルニア州立大学における 13 の teaching performance expectations (教師力)

カリフォルニア州では、教師力の具体として１３の教師力を考えているが、それぞれに

レベル１　教師力を構成している要素に関して十分に理解していること、レベル２　授業を観察して得られるデータ、ケーススタヂィ、学習計画など見たりしてどのような教師力を適用する必要があるかわかること、レベル３　実際の授業において、教師力を発揮して授業を行い評価したり、授業反省などが行えること、といったレベルを設定している。これらの一つ一つに３つの段階があり、満たされるように大学教育実習が運用されている。以下に述べる１３の教師力が実際、実践的に運用できることを目指している。
　もちろん、運用ができるとなっても現職教員と教育実習生では、規準として同じ項目を当てはめたときでも、その充足度は異なる。これは、その後の現職教師版の教師力の基準化の課題になると思われる。

　例えば、上記７のように、国情の違いから生じてくる項目もあるが、その他の資質・能力は国情を超えてどの国でも教育に当たる者に共通する項目が並んでいる。
　カリフォルニア州立大学の教育実習後に期待される具体の能力
　コース紹介を見ると、この教育実習期を終えた段階で備わることが期待されている教師力は、以下のとおりである。

１）カリフォルニア州が示している教育内容について、適切な教授ができること
２）教育内容のスタンダード(the standards)を教えるに当たっては、適切な教授法を用いて計画的に教授すること
３）多様な子どもに対応しながら、わかりやすく教えること
４）効果的に教えるために必要とされる知識・技能・態度(knowledge, skills and attitudes) を十分に理解していること
５）教える内容にふさわしい調査の仕方・理由づけ・解決法 (inquiry, reason, solution)を伝授できること
６）学習過程をモニタリングできること
７）多様な評価方法を用いて、学習状況を評価すること
８）言語科目の熟達の程度を把握するためにデータを活用すること
９）多様な生徒にバランスのとれたカリキュラムを提供するために、教授方法や教授活動、学習と経験とを合一すること
１０）学習目標や授業内容に応じた教授方法を適用し、生徒の学習要求に応じること
１１）高い学力を有する生徒の学習を促進保証すること
１２）学習者の発達レベルに応じた適切な学習を行わせること
１３）学習評価のデータを活用し、教授計画を修正すること
１４）学習過程や日常生活を作り上げ、生徒の学習成果を最大限に伸長させること
１５）適切な学習集団を形成すること
１６）包括的な学習を行うこと
１７）共働性を高めて取り組むこと
１８）自己点検能力を高めること

　次に、この１８の項目とカリフォルニア州の教員免許で期待されている１３の教師力を表にして当てはめてみる。
　これを見ると、特に教師に教科をわかりやすく教える力が強く求められていることわかる。また授業内容に児童生徒の興味関心を引きつけることのできる教師も優れた教師としての指標になっている。
　特に注目したいのは、13 の項目である。この Teaching Performance Expectations が示される上位の Domain には Collaborating with colleagues...という文言が示されている。教師が他の教師と協働したり共同的に働く資質・能力が高く求められていることがわかる。これは、最近の現職教員を対象とする研修内容にも取り上げられている項目となっている。一般企業でも作業能率の高さが、職場の人間関係に比例するという考え方である。日本の教員採用試験におけるグループ作業やグループ討論など、他との関係性に占める割合は、大きい。今後、採用試験と大学

の教育内容の関係性を問うときにはクローズアップされると推測される。

カリフォルニア州指導基準（概要）		教育実習評価項目
教科内容関係	1. 教科教授能力	1、2、3、5
評価関係	2. 学習状況把握	6
	3. 評価とその活用	7，8
学習指導関係	4. 教科への興味づけ	9、10
	5. 学習参加	11
	6. 発達段階と授業	12
	7. 母語でない英語学習	4，9，10
指導計画関係	8. 生徒理解	13
	9. 学習指導計画	13
学習環境関係	10. 授業構成	
	11. 学習環境の設定	
教育者関係	12. 職業意識・義務	
	13. 教師としての専門性	

なお、項目の７の英語が母語話者ではないものに、米国社会市民としてきちんとした生活ができることを保証するための教育にも力点があることがわかるが、これは、米国事情によるものであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 加納幹雄、英語教員養成に関する大学教育課程の改善の視点について、中部地区英語教育学会紀要、査読有、40巻、2011, 113－118.
② 渡部良典、What students really want to learn from the course: A case of students learning English for academic purposes、Bulletin of the Faculty of Foreign Studies, Sophia University、査読有、45巻、2011、109-123
③ 渡部良典、学校のテストは何のために行うのか、英語教育（大修館書店）、査読無、10月号、2009、pp. 10-12
④ 渡部良典、大学入試センター試験の変更と社会的影響について―よりよい教育効果をもたらすために、大学入試フォーラム 2008、査読無、31巻、2009、pp. 39－45

〔学会発表〕（計５件）

① 加納幹雄、教育実習後の質問紙調査にみられる教員としての資質・能力の育成状況に関する分析、第40回中部地区英語教育学会・石川大会、2010年6月27日、石川県立大学
② 渡部良典、Taming the external force - A case of high-stakes testing and the role of assessment in enhancing the quality of life in EFL classrooms、The 2009 Asia TEFL International Conference、August 7, 2009、The Imperial Queens Park Hotel, Bangkok, Thailand.
③ 渡部良典、Innovating in language education by innovating in assessment practice ― why it fails and how not to fail it? テスト、教育、イノベーション―なぜテストで教育を変えようとする試みは失敗するのか、JACET関東支部月例研究会、2009年7月18日、JACET事務室.
④ 渡部良典、The Psychology of Language Assessment ― Roles of language assessment in enhancing the quality of life in language classrooms、PKETA International Conference、Pusan、October 11, 2008
⑤ 渡部良典、テストは生徒を知る道具―入門　テスト・リテラシー、北海道英語教育学会　第 9 回研究大会、札幌藤女子大学、2008 年 10 月 4 日

〔図書〕（計３件）

① 渡部良典、第一章「英語学力評価論」、3－29頁、テスティングと評価―４技能の測定から大学入試まで、（石川祥一、西田正、斉田智里編集）、2011、東京：大修館書店、302.
② 渡部良典、Taming the External Force of High-stakes Language Testing - Identifying Conditions under Which Tests Work for Improving EFL Practices. In Moon, Y. & Spolsky, B. (Eds.) (2010) Language Assessment in Asia: Local, Regional or Global?, pp. 27 - 52. ASIA TEFL
③ 渡部良典、言語テストの作成と評価―あたらしい外国語教育のために、2010、春風社、274.

〔その他〕
ホームページ等
渡部良典、Language Testing Forum30 周年記念研究大会報告、日本言語テスト学会 Newsletter、7－11.

６．研究組織
(1)研究代表者
渡部　良典（WATANABE YOSHINORI）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：２０１６７１８３

(2)研究分担者
加納　幹雄（KANO MIKIO）
金沢大学・教育学部・教授
研究者番号：７０３５３３８１